

会員発表 要旨

発表 ①:

タイトル:

「日本語教師の成績評価に関する日独間の文化的差異 - 評価ビリーフの質的調査 -」

Deutsch-japanische Unterschiede in den Bewertungskulturen
– eine qualitative Studie zu ‚beliefs‘ von Japanischlehrern bei der Notengebung.

発表者:

濱田朱美(チュービンゲン大学), 筆頭者

Akemi Hamada (Universität Tübingen)

西島順子(同志社大学), 共同発表者

Yoriko Nishijima (Dōshisha-Universität)

【要旨】

本発表ではまず、チュービンゲン大学(以下「TÜ 大学」)の留学システムを紹介し、次にその特徴的な環境下における日本語教師の成績評価に見られる文化的差異の調査報告を行う。

1993 年以来 TÜ 大学日本学科は、日本の同志社大学内に「分校」(以下「センター」)を持ち、日本学を主専攻とする学部生は、カリキュラムの一環として全員が 4、5 学期の一年間、センターに留学する。センターで取得する単位は TÜ 大学の必須単位であり、その成績評価方法は TÜ 大学の評価規範に則る。しかし、これまでセンターの非常勤講師と成績評価に対する価値観の相違が見られた。よって、本研究ではセンターの教師 3 名を被験者とし、質問紙とインタビューにより質的調査を実施し、その成績評価に関わるビリーフを明らかにした。その結果、日本の教師は学習者の「努力」「継続」「成長」「到達」を評価する傾向が見られ、学習プロセス重視の姿勢が明らかになった。

本研究は日本と欧州における評価の文化的差異を明らかにすることで、国内外の日本語教育関係者に新たな視点を与えることを目的とする。

発表 ②:

タイトル:

「書く」活動は話す能力を育成できるのか

Kann die Sprechfähigkeit durch Schreibaufgaben verbessert werden?

発表者:

村田裕美子(ミュンヘン大学)

Yumiko Murata (Ludwig-Maximilians-Universität München)

【要旨】

海外の学習環境では、「話す」活動を実施しても、学習者に「話す」機会や個別のフィードバックが十分に提供できないといった問題を抱えている日本語教育機関が少なくない。一方で「書く」活動は、「話す」活動に比べ、学習者それぞれに産出の機会を与えることができ、課題に対して個別のフィードバックを提供することも可能であるというメリットがある。このメリットを活かし、「話す」と同じ産出活動である「書く」活動を会話などの「話す」活動にうまく取り入れることで、「話す」能力を伸ばすことができないだろうか。本発表では、この問い合わせをふまえて、同一被験者が同一課題で「話す」活動を2回行ったとき、1回目と2回目の間に「書く」活動(作文)がある場合と「書く」活動がない場合とで、2回の発話の言語的特徴を比較し、作文を書いたという経験によって、2回目の発話が1回目よりも流暢に、より複雑に、そして話題が深くなることを実証した研究を紹介する。